「日本スペイン人文学セミナー」関連企画展示

期間：平成 27 年 1 月 6 日(火)～2 月 12 日(木)
場所：愛知県立大学長久手キャンパス図書館 1 階フロア
主催：愛知県立大学長久手キャンパス図書館、
　　大航海時代の戦国愛知研究会
協力：茨木市立キリシタン遺物史料館

＜企画展示＞

「日出づる国と日の沈まぬ国―日本とスペインの 400 年目の再会―」

東アジアの小国日本は、7 世紀に「日出ずるところ」と自認した。聖徳太子の時代の、帝国隋を中心とする世界秩序に加わる上での背伸びである。イベリア半島のスペインは、16 世紀に「日の沈まぬ国」と誇った。フェリペ二世の時代の、地球の反対側にも植民地をもつ帝国の自負である。別々の歴史的、地理的な脈絡でありながら、ともに権力者の自称として共通する。同時に両者は、ほとんど無自覚にであろうが、陽の光を受ける万人共通の世界、という共通認識を前提にしている。このことに注意が必要である。

日本とスペインは、それぞれの歴史を背負いながら、1549 年のフランシスコ=ザビエル来日を嚆矢に、1613 年の慶長遣欧使節団など、直接の関係をもった。それらは経済活動だけでなく、キリスト教の布教と受容がともなっていた。日本人にとっては、生きる支えとしての思想や信条の問題に、大きな提起力をもつ異文化との遭遇であったに違いない。

日本では 17 世紀に「鎖国」政策が進んだ。スペインでは国力が減退した。そして両者の直接的交渉は遠のいた。しかし、大航海時代の戦国日本におけるイベリアインパクトは、今日の予想以上に大きかった。キリスト教信者の人数はその一端を示しており、40 万人から 60 万人といわれる。しかも、生きた思想の根強さは、禁教後にも「隠れキリシタン」として長く受けつがれた。

19 世紀半ば、日本は「開国」し、欧米諸国との本格的関係が始まった。1865 年（慶応元年)、長崎大浦天主堂のフランス人宣教師に対して、地元の日本人が信仰告白したのをはじめ、九州の各地から数千人の信者が名乗り出たという。しかし政府はなおキリスト教を禁止し、1868 年（明治元年）に浦上の信者らを逮捕・流罪にした。キリスト教の禁止解除は 1874 年だが、苦難の経験は、なお各地のキリスト教徒を潜伏させる結果となった。

1919 年（大正 8 年)、大阪府茨木市千提寺なる山村から、上野マリヤのキリシタン墓碑が世に出た。翌年、同地の東家に秘蔵されてきた「あけずの櫃」からキリシタン遺物が見出され、近隣からも多くの信仰遺物が見出された。命がけで伝えられた信仰の証である。1926 年（大正 15 年）には、ローマ教皇使節一行が同地を訪れ、信者たちと邂逅している。

2013 年と 2014 年は、支倉常長ら一行がスペイン経由でローマに旅立って 400 年目として、様々な事業が両国間で催された。この機会に、本学からも学術交流面で加わっており、2015 年 1 月 13 日・14 日には本学を会場に「日本スペイン人文学セミナー」が実施される。本格的な両国交流を将来に託した新しい画期という意味を込めて、「400 年目の再会」を噛みしめる展示を、ここに企画した。権力者ならぬ民衆の目線で、真に万人共通が陽を受ける世界を求めて、過去の信仰遺物を目の当たりにしてみたい。

ご協力いただきました茨木市の東満理亜様、茨木市教育委員会様（黒須靖之様）にお礼申し上げます。

（日本文化学部歴史文化学科　上川通夫・川畑博昭）

Fechas: Martes 6 de enero - viernes 12 de febrero de 2015
Lugar: Primer piso de la Biblioteca de la Universidad Provincial de Aichi
Organiza: Biblioteca de la Universidad Provincial de Aichi
Proyecto “El Estado Guerrero de Aichi en la Era de los Descubrimientos”
Colabora: Museo del Patrimonio Cristiano de Ibaraki

"El Imperio del Sol Naciente y el Imperio en el que nunca se pone el sol: un reencuentro entre España y Japón 400 años después"

En el siglo VII, un pequeño país de Ásia del Este, Japón, presumía de ser el “Imperio del Sol Naciente”. Esta fue la postura de Japón en el periodo del Príncipe Shōtoku, que quería aparentar más de lo que era para integrarse en un orden geopolítico cuyo núcleo central era el Imperio chino de la dinastía Sui. Por otra parte, en la Península Ibérica del siglo XVI, España hizo lo mismo con una conocida expresión de Felipe II, quien denominó a su territorios, que se extendían por ultramar alcanzando todos los continentes, “el Imperio en el que nunca se pone el sol”. A pesar de que cada uno se desarrolló en un diferente contexto histórico y geográfico, aquí se observa una característica común: la autoestima de quien poseía el poder. Asimismo, quizá inconscientemente, ambos casos parten de una visión similar que suponía una humanidad que vivía bajo la luz del sol. Este aspecto merece atención.

Japón y España, enmarcados en sus propias historias, fueron entablando relaciones bilaterales directas empezando por la llegada a Japón de Francisco Javier en 1549 y continuando con el envío de la Embajada Keichō en 1613. Este contacto no se ciñó sólo al ámbito económico sino que fue acompañado por la evangelización del cristianismo y su recepción. Para los japoneses, no cabe duda de que éste fue un encuentro intercultural de gran impacto, que conllevó el cuestionamiento de ideas y convicciones esenciales para su vida.

El Japón del siglo XVII progresó en su política de “aislamiento” mientras el poder de España decaía. De esta manera, el contacto directo bilateral quedó interrumpido. Pese a ello, el impacto ibérico en el periodo de los estados guerreros del Japón de la Era de los Descubrimientos fue mayor de lo que se creía. Parte de ello se percibe en el número de japoneses convertidos al cristianismo, estimado entre 400.000 y 600.000. Además, las ideas vivas han sobrevivido vigorosamente en la fe de los “cristianos ocultos” durante siglos, aún tras la prohibición de la fe cristiana.

A mediados del siglo XIX, Japón “abrió” sus puertas hacia el exterior y así comenzó a entablar relaciones con los países occidentales. Se dice que además del caso que ocurrió en la Iglesia de Ōura (Nagasaki) donde la gente natural de esta tierra confesó su fe ante un misionero francés en 1865, primer año Keiō, en varias partes de

Kyūshū, isla de la que forma parte Nagasaki, aparecieron miles de cristianos afirmando sus creencias y prácticas. Sin embargo, el gobierno, que aún mantenía una estricta política de prohibición del cristianismo, detuvo y desterró a los cristianos de Urakami (Nagasaki) en 1868, primer año Meiji. Dicha prohibición se derogó en 1874 pero, de tantas adversidades vividas, resultó el cristianismo latente en todas las zonas.

En 1919, año 8 Taishō, salió a la luz la lápida sepulcral de Maria Ueno en un pueblo Sendaiji, ubicado en la ciudad de Ibaraki (Osaka). Al cabo de un año, fueron encontrados varios objetos cristianos en una arca que tenía escrito “No abrir nunca” (*Akezuno hitsu*) guardada en secreto por la Familia Higashi de este pueblo junto con otras reliquias de fe cristiana en su vecindad. Prueba auténtica de la fe guardada a costa de la vida. En 1926, año 15 Taishō, una delegación vaticana visitó este lugar y se encontró con los creyentes.

En el Año Dual 2013 – 2014 numerosas actividades fueron realizadas con motivo de la conmemoración del IV Centenario de la travesía de la Embajada de Tsunenaga Hasekura que se dirigió hacia Roma vía España. Formando parte de dichos actos, dentro del ámbito del intercambio académico, esta universidad celebrará los días 13 y 14 de enero de 2015 el “Seminario de Estudios Comparados de Humanidades España – Japón”. Con el deseo de hacer una nueva época para el futuro intercambio bilateral, se ha organizado una exposición que nos permita saborear nuestro “reencuentro 400 años después”. Desde la perspectiva del pueblo, y nunca del gobernante, y en busca de un universo donde todo el mundo pueda verse iluminado igualmente por el sol, esperamos que sientan la atmósfera de aquellos momentos que trasmiten estas reliquias religiosas.

Nuestro profundo agradecimiento a la señora Maria Higashi de Ibaraki (Osaka) y al señor Yasuyuki Kurosu del Consejo Escolar de dicho ayuntamiento por su generosa cooperación.

Facultad de Estudios Japoneses
Departamento de Historia y Cultura
Michio Kamikawa
Hiroaki Kawabata

キリシタン叢書の世界

16 世紀末から 17 世紀前半にかけて、日本語やスペイン語・ポルトガル語・ラテン語などで書かれたキリスト教文献は数多い。教義書のほか、宣教師・信者の書簡や著作などである。

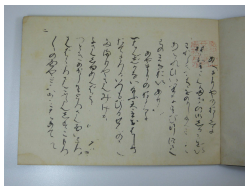
刊本は、キリシタン版と総称される印刷書物である。1580 年以来、イエズス会士バリニャーノらによる日本最初の活版印刷によって刊行がはじまった。1614 年に全国へのキリスト教禁止令が出されるまでの 24 年間に、100 点以上が刊行されていたようで、現存は 32 点を数える（うち日本には 12 点）。また手書きのキリシタン文献も多い。中には、刊本のキリシタン版を手本にした書写本もある。

1919 年（大正 8 年）に大阪府茨木市から数多くのキリシタン遺物が見出され、注目を集めた。それらを中心として、1927 年（昭和 2 年）から 1929 年（昭和 4 年）にかけて、大阪毎日新聞社は「吉利支丹叢書」として複製を公刊した。別名を「珍書大観」と名づけている。その中には、不幸にして原本が失われたものもある。90 年過ぎた今日、すでにその複製本が貴重な文化遺産である。

このコーナーでは、「吉利支丹叢書」の一部を展示する。また、江戸時代に創作されたキリシタンを題材とする物語 1 点を紹介する。

(1)『オラショ雑纂断簡』　1 冊

Oracio Zassan Dankan / Fragmentos de compilación de las oraciones

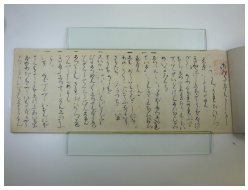


江戸時代慶長・元和頃　写本・複製（大阪毎日新聞社 1928 年、愛知県立大学図書館貴重書庫架蔵：請求記号 080/29/3）　徳川国順蔵本　四ッ目綴　縦 16.2 ㎝×横 22.0 ㎝　8 丁　別紙表紙

オラショとは祈祷文のことである。「どちりなきりしたん」（Doctrina Christiana ラテン語）には、パーテル・ノステル（主の祈り）、アベ・マリア（天使祝詞）、ケレド（使徒信経）、マダメント（十戒）などの祈り文句を邦訳している。本書にも「あへまりやの於ら志よ」などと見える。オラショには、ポルトガル語、ラテン語、キリシタン用語が交じっている。禁教時代には口伝で受けつがれ、原形をとどめている一方、内容よりも呪文として唱えられているともいわれる。長崎で伝えられていたほか、1920 年代には大阪府茨木市の山間村落でも唱えられていたことが、3 人の老女のビデオに記録されている。

(2)『羅甸文（らてんぶん）平仮名書弥撒（みさ）唱文及連祷断簡』　1 冊

Latenbun Hiraganagakí Misa Shoumon oyobi Rentou Dankan /
Fragmentos de devocionario y letanía en latín transcritos en letra japonesa *Hiragana*

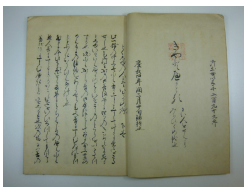


17 世紀ヵ　写本・複製（大阪毎日新聞社 1928 年、愛知県立大学図書館貴重書庫架蔵：請求記号 080/5/3）　徳川国順蔵本　四ッ目綴帳　16.0 ㎝×13.8 ㎝　3 丁　別紙表紙

羅甸文（ラテン文）を平仮名で音を写し、弥撒（ミサ）で唱える短い文句を記した書。冒頭に「御みさねんし方」（御ミサ念じ方）とある。一部が断簡として残されているのみで、実際によく使用された可能性がある。

(3)『ぎゃどぺかどる』　1 冊

Gyadopekadoru / “Guia do Pecador” [Guía de Pecador]



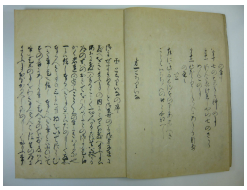
1599 年（慶長 4 年）　写本・複製（大阪毎日新聞社 1928 年、愛知県立大学図書館貴重書庫架蔵：請求記号 080/3/3）　中谷仙之助蔵本　大和綴　縦 27.0 ㎝×横 19.4 ㎝　6 丁　別紙表紙（外題・題簽）「きやとへかとる」（内題）とく志ゆの人にたいするの序　下巻

（表紙見返）御出世以来千五百九十九年／きやとへかとる／さい人をせんにみちひくの儀也／慶長四　年潤三月中旬鏤梓也

名称は Guia do Pecador の音写。修徳書とも訳されるキリスト教の教義書。スペイン人のドミニコ会士ルイス=デ＝グラナダの著書 Guia de Pecadores（1556 年刊）の日本語抄訳本。書名はポルトガル語形。表紙見返の題の下に「罪人を善に導く儀也」と記されているように、神の尊さや作善の意義・方法を説いている。諸本が伝存するが、完本はバチカン図書館と大英図書館にある。1922 年（大正 9 年）に大阪府茨木市で発見された写本（東京大学図書館所蔵）は刊本の写しであり、序と目録（下巻第一篇・二篇）のみである。

(4)『どちりなきりしたん』　1 冊

Dochirina Kirishitan / “Doutrina cristã” [Doctrina Cristiana]

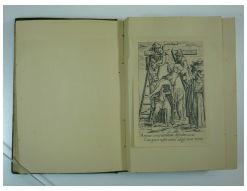


江戸時代　写本・複製（大阪毎日新聞社 1928 年、愛知県立大学図書館貴重書庫架蔵：請求記号 080/32/3）　中谷仙之助蔵本　四ッ目綴　縦 29.0 ㎝×横 21.4 ㎝　88 丁　別紙表紙

書名は Doctrina Christao（ポルトガル語）、Doctrina Christiana（ラテン語）に由来する音写。キリスト教要理の意味で、平易な問答体で書かれた教科書。ザビエルはインドで使用していた 29 か条、日本に来てからアンジロー（日本人）に訳させた。またポルトガル人のイエズス会士ジョルジュ（M.Jorge）が 1566 年にリスボンで上梓した本も、海外布教に用いられ、日本語訳もされた。1590 年に来日したバリニャーノが活字印刷版を作り、決定版となった。ヴァチカン図書館蔵本（1591 年加津佐刊）やローマ・カサナテ図書館蔵本（1600 年長崎刊）に日本語版の古本がある。ローマ字本もある。師と弟子の問答形式である。

(5)『西洋銅版画帖』　1 冊

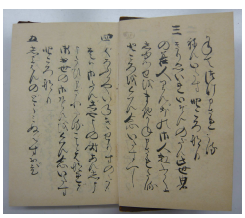
Seiyou Douban Gachou / Catálogo de pinturas de grabado occidental en cobre



江戸時代 17 世紀ヵ　刊本・複製（大阪毎日新聞社 1928 年、愛知県立大学図書館貴重書庫架蔵：請求記号 080/9/3）　徳川國順蔵本　洋装本　16.8 ㎝×12.0 ㎝　46 丁

(6)『吉利支丹抄物』　1 冊

Kirishitan Shoumotsu / Libro del cristiano

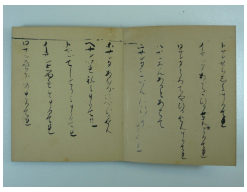


江戸時代寛永頃　写本・複製（大阪毎日新聞社 1928 年、愛知県立大学図書館貴重書庫架蔵：請求記号 080/6/3）　東藤次郎蔵本　粘葉装　縦 15.0×横 9.5 ㎝　142 丁　別紙洋装表紙

旧高槻領の一部に当たる大阪府三島郡清溪村大字千提寺（現茨木市）の旧キリシタン東(ひがし)家から、1920 年に数多のキリシタン遺物とともに発見された国字の古写本。おおよそ 12 章節の構成だが、書写者、年代、題名、目次、出典の記載を一切持たない抄出書きの体裁で、名称はそれに因む。近年の研究により、16 世紀スペインの思想家・説教師ルイス・デ・グラナダの“Guía de pecadores”を始めとしたいくつかの著作から構成される説教マニュアルであることが確認された。キリシタン集団の世話をした日本人「看坊」が説教代行として朗読するための実用的なノートとして作成されたとみられる。原本は現在所在不明であり、複製のみが残る。

(7)『諸聖人記念日表』　１帖

Shosheijin Kinenbi hyou / Calendario de los Santos

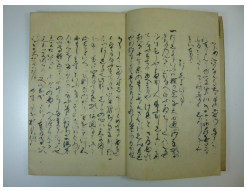


17 世紀前半（寛永頃）　写本・複製（大阪毎日新聞社 1928 年、愛知県立大学図書館貴重書庫架蔵：請求記号 080/33/3）　徳川國順蔵本　折本　縦 11.1 ㎝×横 9.3 ㎝　21 折　別紙表紙　漢字・平仮名・片仮名の文　裏書あり

カトリック教会では、キリストの生涯と関係づけた典礼暦や、歴史上の聖人を記念する聖人暦が作成されている。本書は後者で、イロハ順に整理した箇条書きされている。主に平仮名を用いており、キリスト教特有の記号も散見される。「あへまりや三へん申て」「さんたまりやにさゝけ候」などの文言が見え、期日に唱えることが想定されている。小型の折本という形態は、身近に携帯することを想定したのであろう。

(8)『吉利支丹心得書　上冊・下冊』　２冊

Kirishitan Kokoroegaki / Libro de decencia del cristiano

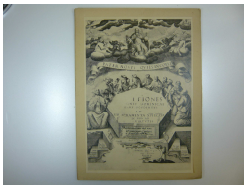


17 世紀前半　写本・複製（大阪毎日新聞社 1928 年、愛知県立大学図書館貴重書庫架蔵：請求記号 080/1/3）　徳川国順蔵本　四ッ目綴　縦 23.5 ㎝×横 16.2 ㎝　38 丁(上冊)・36 丁(下冊)　別紙表紙

『どちりなきりしたん』の異本と見なされており、原本の成立は 1594 年刊かとされている。1596 年には長崎で二十六聖人殉教事件が起こっているが、死・審判・地獄・天国についての記述が特徴的であり、殉教を想定して書かれた可能性がある。「はらいそ」（天国）、「いんへるの」（地獄）といった、平仮名による表記が読み取れる。

(9)『銅版画』　１葉

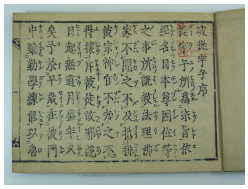
Doubanga / Pintura de grabado en cobre



17 世紀ヵ　銅版画・縮小複製（大阪毎日新聞社 1928 年、愛知県立大学図書館貴重書庫架蔵：請求記号 080/20-23/3）、東藤次郎氏所蔵

(10)『破提宇子』　1 冊

Hadeusu / Crítica a Dios



1620 年（元和 6 年）　ハビアン著　刊本・複製（大阪毎日新聞社 1928 年、愛知県立大学図書館貴重書庫架蔵：請求記号 080/27/3）　京都帝国大学図書館蔵本　四ッ目綴　縦 19.8 ㎝×横 13.1 ㎝　58 丁　別紙表紙　（表紙外題）題簽「破提宇子全」　（刊記）元和六年庚申暦孟春

著者ハビアン（日本人、1565-1621、本名不詳）は加賀の生れで大徳寺僧になった。1583 年（天正 11 年）に母（北政所おねの侍女、ジョアンナ）とともに洗礼を受け、高槻や大坂のセミナリヨで学び、イエズス会のイルマン（修道士）となった。『妙貞問答』 を著わしたほか、仏教批判の論陣を張り、1606 年（慶長 11 年）に林羅山と宗論をたたかわした。1608 年（慶長 13 年）、修道女と駆け落ちして棄教、のちキリシタン迫害に荷担した。本書は、晩年のキリスト教批判書（デウスを破却する意）である。デウスの実在性、霊魂や天国・地獄、アダムとイブの説話、キリストの出生・十戒などについて説明しつつ、その中でキリスト教を批判している。仏教とキリスト教の双方に通じた知識人の書物。

(11)『吉利支丹法服諸器物目録略図』　1 冊

Kirishitan Houfuku Shokíbutsu Mokurokuryakuzu /

Croquis del inventario de vestiduras y utensilios del cristiano

1800 年（寛政 12 年）　写本・複製（大阪毎日新聞社 1928 年、愛知県立大学図書館貴重書庫架蔵：請求記号 080/4/3）　徳川国順蔵本　四ッ目綴　縦 27.1 ㎝×横 18.1 ㎝　14 丁　別紙表紙　図像あり原本は 17 世紀ヵ　（外題）題簽「吉利支丹法服諸器物目録略図」　（内題）吉利支丹法服諸器物

キリスト教徒の信仰生活で用いられる諸道具について、図像で示したもの。本尊仏龕、キリスト像、法服、ロザリオ、メダイなど数多くを墨線で描いている。冒頭に寛政 12 年（1800 年）12 月 29 日付けで立原甚五郎の序文がある。それによると、1618 年（元和 4 年）や 1628 年（寛永 5 年）など複数の書物から写したらしい。もとの本は、キリシタンからの没収物を書き上げたものであろう。ただ、メダイの図像は、実物に紙を押し当てて型どりしたようにも見える。寛政段階、すでにキリスト教徒は隠れキリシタンになっていたが、なお警戒感をもっていた権力によって、見慣れぬ信仰道具を照合する図集として書かれたものであろう。

(12)『江州伊吹艾草物語（ごうしゅういぶきもぐさものがたり）』　1 冊

写本　書写年不明　個人蔵　四ッ目綴　縦 25.4 ㎝×横 16.0 ㎝　54 丁　（外題・題簽）「江州伊吹艾草物語　全」（内題）外題と同　（印記）1 丁表と 54 丁裏に「上諏方／白木屋／五兵衛」の印記があり、信濃の貸本屋が貸し出した写本と思しい。

渡来したキリスト教を織田信長が受け入れるが、キリシタンが邪術を用いて布教したため、白應(はくおう)居士はキリシタン側のハビヤンと問答を行う。問答に敗れたキリシタンは、術を披露して豊臣秀吉にとりいろうとし、逆に秀吉に邪教と判断されて、禁教となる。

寛永 16〈1639〉年頃、仮名草子『吉利支丹物語(きりしたんものがたり)』が出版されるも、後に取締によって版本は刊行されなくなり、以降は写本の体裁で流布した。本書は、キリシタンのコウスモウ・シユモンが、秀吉の前で魔術を披露するなどの〈虚構〉が加わった〈実録体小説〉の一つ。

命がけで守り伝えた信仰―東（ひがし）家の伝世品―

1919 年（大正 8 年）以来、大阪府茨木市千提寺や下音羽の山村旧家から、300 年以上にわたって守り伝えられたキリスト教信仰の証が世に出た。中でも、千提寺の東家からは、屋根裏の梁にくくりつけられた「あけずの櫃」が開けられ、今日著名なフランシスコ=ザビエル画像をはじめとするキリシタン遺物が見出された。それらは、20 世紀にも、親族の一部で、一年に一度ひっそりと確認されたのだという。

通常、キリシタン遺物には、①文書類、②教書類、③絵画・銅版画・金工品など、④風俗（衣服・食器・クルス・ロザリヨ・墓碑など）、⑤信仰対象（偶像・メダイ・ロザリヨなど）、があるといわれる。東家に伝えられたそれらは、忘れられた「遺物」でも、偶然発見された「遺品」でもない。命がけで守り伝えられた信仰の証である。

そのことは、20 世紀前半にもオラショ（祈祷文）を伝えた人々が実在したことからも、確実に言える。ぜひとも、その場面を含むＤＶＤ「世界へ羽ばたく・キリシタン遺産」（茨木市立文化財資料館）を視聴していただきたい。

なお、東家所蔵品の全貌については、茨木市立キリシタン遺物史料館に常設展示されている。このコーナー展示は、同史料館から出品していただいたものである。

(13)『教皇グレゴリオ 14 世メダイ』（原品）

Kyoukou Guregorio juyonsei medai / Medalla del Papa Gregorio XIV

金属製　縦 2.2 ㎝×横 1.5 ㎝　茨木市東家所蔵
（左が表側、右が裏側）

メダイは、小型で薄い円形の金属板で、表面や裏面に、キリスト、マリア、聖人、聖堂、キリスト教シンボルなどが刻まれる。カトリック信者の携行品で、ロザリオの中心部分に連結させるものも多い。グレゴリウス 14 世（Gregorius XIV）はローマ教皇（在位 1590 年-1591 年）。在位期間は短いが、スペイン寄りの政治姿勢を示したことで知られる。表面には教皇の横顔が彫られており、表記によってグレゴリオ 14 世だとわかる。裏面には、左にマリア、右にキリストが描かれている。1920 年（大正 9 年）に茨木市の東家にあった「あけずの櫃」から見出された遺品の一部。

(14)『象牙彫マリア像』（原品）

Zougebori Maria Dzou / Estatua de marfil tallada de la Virgen María

象牙製　7.8 ㎝

茨木市千提寺の故東藤次郎宅の母屋には、屋根裏の梁にくくりつけた「あけずの櫃」が伝わっていた。命がけで守られてきた信仰の遺品である。1920 年（大正 9 年）に、フランシスコ・ザビエル像などとともに、その存在が明らかとなった。象牙彫マリア像もその一つである。21.5 ㎝の木製キリスト像も同じ所から見出されている。これら小型の像からは、信仰対象を肌身に携行し、時には人目を忍んで祈る信者の姿が、彷彿と浮かぶ。

(15)『聖フランシスコ・ザビエル像』(複製)

Seí Furanshisuko Zabieru zou / Retrato japonés de San Francisco de Xavier (réplica)

紙本着色　17 世紀前半　縦 61.0 ㎝×横 48.7 ㎝　神戸市立博物館所蔵
茨木市東家旧蔵

イエズス会の指導で、銅版画を手本として、日本人絵師が描いたと見られている。ザビエルが聖人列せられた 1622 年以後まもなくの作品らしい。ザビエルの口から発せられているのは、「SATIS EST DNE SATIS EST」(十分なり主よ、十分なり)ということばである。手に持つ十字架の上部にある「ＩＮＲＩ」は「ユダヤ人の王、ナザレ人イエス」の略号。十字架の途中にある「ＩＨＳ」はイエズス会の徽章。下段には、「S.P.FRACISCUS XAVERIVS SOCIETATISV」(聖父イエズス会士フランシスコ・ザビエル)とある。最下段の漢字は、いわば画賛である。右から「嵯夫羅怒青周呼山別論廖嵯可羅綿都(サフラヌシスコザビエルサカラメント)　漁夫環人」とある。漁夫環人については、絵師名などの説がある。

(16)『マリア十五玄義図』(複製)

Maria Jugogengizu / 15 Ilustraciones de la biografía de la Virgen María (réplica)

紙本着色　17 世紀前半　縦 81.6×横 64.8 ㎝

茨木市東家所蔵日本人キリシタンの画家による作品。聖母マリアの生涯を、「喜びの玄義」(左側下から５コマ)、「悲しみの玄義」(上部左から５コマ)、「永福の玄義」(右側２コマ目から５コマ)に分け、キリストの生涯を絡めて絵画表現している。中央の上半はイエスを抱くマリア(顔面部は欠失)、下半の宣教師はイグナチウス=ロヨラ(左)とフランシスコ=ザビエル(右)。二人の間にはイエズス会の徽章がある。画面中央のポルトガル語は、「いとも貴き秘蹟、讃仰せられよ」の意。1920 年(大正 9 年)に大阪府茨木市の東家屋敷の屋根裏にあった「あけずの櫃」から見出された。

(17)『茨木吉利支丹信者写真』

Ibaraki Kirishitan shinja shashin / Fotografía de los cristianos de Ibaraki

1919 年(大正 8 年)、大阪府茨木市千提寺の集落で、キリシタン墓碑が発見され、続いて千提寺・下音羽から数々のキリシタン遺物が見出された。それらは埋もれた文化財ではなく、生きた信仰の証である。写真の老女たちは、オラショを継承しており、節を付けて唱える姿が映像記録されている(ＤＶＤを参照)。命がけの信仰を現代に伝えた姿は、将来にわたる生き証人と呼ぶにふさわしい。

(18)『上野マリア墓碑』(複製)

Ueno Maria Bohi / Lápida sepulcral de María Ueno (réplica)

原品は花崗岩製　1603 年（慶長 8 年）
縦 66.5 ㎝×横 38.0　㎝×厚 18.2 ㎝
（右側は拓本）

大阪府茨木市千提寺寺山で発見されたキリシタン墓碑である。中央上部には、「干」に似た二支十字が記され、その下に「上野マリや」、向かって右に「慶長八年」、左に「正月十日」と陰刻している。かつては地元の若衆が力比べに持ち上げていたというが、一見してキリシタン墓であることがわかる。1919 年（大正 8 年）に発見されたもので、千提寺や下音羽の山村で数多くのキリシタン遺物が見出されるきっかけとなった。同地には 6 基のキリシタン墓碑が知られるほか、近年の新名神高速道路工事にともなう発掘調査によって、キリシタン墓らしき遺構が複数発見されている。

大航海時代の姿

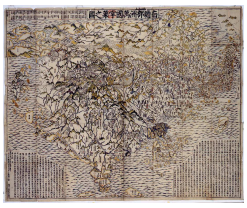
大航海時代の姿は、古文献や古地図などによっても、意外な実像をありありと見ることができる。このコーナーでは、写真パネルによって、想像の翼を拡げる手助けとしたい。

大航海時代の日本を語る古文献は、ヨーロッパの図書館や大学、教会などに、まだまだ眠っているようである。スペイン語・ポルトガル語・イタリア語・ラテン語などによる記述の一部に、日本のことが含まれている。ここに展示する諸例は、氷山の一角である。その中にさえ、徳川家康の実子にキリスト教徒がいたことなど、瞠目すべき発見がある。外なる視点で書かれた日本観察記録は、むつかしい史料批判の問題があるものの、豊饒な史実の宝庫である。

古地図は、厳密さを追究する現代の地図とは違って、立場と認識を表現する一つの方法として、読み取りごたえがある。スペインのセビーリャや、ポルトガルのリスボンは、大航海時代の世界を代表する拠点都市である。古地図からは、その実態とともに、形成期資本主義が人間世界をいかに作りかえようとしたのかといった、本質的な意味を潜ませている。また江戸時代の日本人による世界地図からは、鎖国日本と大航海世界の折り合い付かない接点を前にした、唸りや嘆息が聞こえてきそうである。

古文献や古地図に記された現地を訪れる機会に、このコーナー展示のことを思い出していただけたら幸いである。

(19)『南瞻部州万国掌菓之図』　―根強い非現実の世界像―



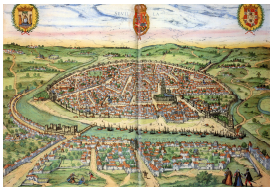
1710 年(宝永 7)刊　1 幅　縦 117.0 ㎝×横 144.0 ㎝　紙本着色　京都大学文学部所蔵

仏教経典に基づく世界地理認識は、須弥山のふもとにある南瞻部州と呼ばれ、日本中世に知識としてある程度拡がっていた。しかし、大航海時代のヨーロッパ人は世界地図やその南蛮屏風、さらには地球儀を日本にもたらしており、その衝撃力は想像するにあまりある。イエズス会宣教師マテオ・リッチが 1602 年に中国で作成した「坤輿万国全図」は、五大州を中心としてそれなりによく世界を見渡しており、日本に大きな影響を与えたらしい。ここに紹介するのは、なおも仏教的世界観の濃厚な、日本近世の世界図である。僧鳳潭の作である。

この図は、天竺（インド）を中心にする点では伝統を踏んでいるが、東方に中国・朝鮮・日本を大きく描く点はかつてない。また、西方にはイタリヤ・アルハニヤ・インケレル・フランサ・エウロパといった国名が、島々として書かれている。しかも日本の南方海上の小島の中には「伯西見」(ブラジル)が見え、実態的ではないもののアメリカ大陸が含まれている。正確でないのはもとより、アフリカが含まれていないなど、情報と見識に偏りがあることはまぬかれない。

大航海時代を経過した日本近世に、ヨーロッパからの知識と、日本中世以来の観念とが、呻吟を含んだ融合を見せているようで、時代の個性を読み取るべき重要史料である。

(20)『セビーリャ古地図』



「Sevilla」1588 年刊行 *Civitates Orbis Terrarum*（『世界の諸都市』）第 4 巻第 2 図 縦 355 ㎝×横 475 ㎝　刊本彩色（ジョン・ゴス著　小林章夫監訳『ブラウンとホーヘンベルフのヨーロッパ都市地図』同朋舎出

版、1992 年に図像掲載）

15 世紀末のコロンブスによるアメリカ大陸発見以降、スペインによる新大陸交易の玄関港とされたのが、セビーリャである。セビーリャは、河口から約 80 ㎞遡った、グアダルキビル川の河川港である。この地点が大型帆船の遡上限界であり、内陸に向かう街道との結節点であったことから、16 世紀のスペインを代表する港湾都市として急速に発展した。本図には、河岸に多数の帆船と、荷物の運搬用の小型のはしけ船が停泊している様子が描かれている。市街地をまわる城壁と河岸の船着場との間には、一定の空閑地が広がっており、公的な港湾空間の管理がなされていたことを推定させる。

(21)『リスボン古地図』　―川岸と斜面に広がる、大航海時代の港町―

「リスボン　Lisboa」1958 年刊行　Civitates Orbis Terrarum（『世界の諸都市』）　第５巻第２図　縦 370cm×横 470cm　刊本彩色

リスボンは、ポルトガル・スペインの拠点港として発達した、大航海時代を代表する港町である。大西洋に注ぐテージョ川に面しているが、テージョ川は川幅が広く、水深も深いため、外洋を航行する大型船の進入も十分可能であった。港の背後にはすぐに山が迫り、リスボンの港町はこの斜面に広がった。この川岸と斜面に広く発達した都市景観が、大航海時代の港町リスボンの特徴である。しかし、そこには古代ローマや中世イスラムといったそれ以前の景観も含まれ、歴史の重層する都市景観でもあった。

(22) ルイス・フロイス『日本に関する報告書簡』　―南蛮宣教師の眼―

Cartas de Iapao do padre Luis Froes

1549 年イエズス会のフランシスコ・ザビエルの来日以来、多くの宣教師が来日している。宣教師たちは、世界各地でキリスト教宣教にたずさわると同時に、各地の地理や気候、住民やその社会について書き記し、それぞれが所属する修道会関係者に手紙として送っている。手紙は写しが作られ、別々のルートや別々の船で複数送られ、また当時、世界各地を知る資料としていくつかの手紙が集められ印刷された。16・17 世紀の日本の各地を訪れたポルトガル人やスペイン人などの宣教師による報告は、当時の日本を知る貴重な記録となっている。

ポルトガル出身のルイス・フロイスもそのような宣教師の一人で、1563 年 31 歳の時に現在の長崎県にある港から日本に上陸、主に畿内や九州を拠点に活動し、1597 年長崎において 65 歳で没した。1569 年に京都と岐阜で「尾張の王・織田信長」（Nobunanga Rey de Voari）に面会し、その人物像や岐阜の町、信長の宮殿、城を描写した手紙や、尾張初のキリシタン・コンスタンティノに関するものなど、多くが現存している。

(23) ベルナルディーノ・アビラ・ヒロン『日本王国記』　―南蛮商人の眼―

Bernardino de Avila Girón：Relaçion del Reyno del Nippon a que llaman corruptamente Jappon (1615) (Patrimonio Nacional)

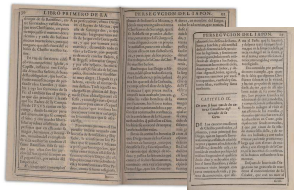
―南蛮商人が語る信長の権力掌握の実態―

文書はスペイン語で書かれているものの、アビラ・ヒロンが頻用していた日本語が至るところに見られ、そこからヨーロッパ人と日本人との最初の言語文化的接触の瞬間をうかがい知ることができる。例えば、パネル黄色箇所に「殿

（Thonos)」や「侍（Çamurays)」（現代スペイン語では“samurái” と表記）といった、スペイン語表記法に受容された用語が見られる。それらの用語が複数形で書かれていることから、スペイン語文法にも組み込まれていることがわかる。

パネル原文は、アビラ・ヒロンによれば 1541 年のことで、勘十郎の死後、織田信長が尾張と美濃の領有権を掌握し、岐阜城の築城を命じる時期に当たる日本の歴史について述べる部分である。黄色箇所に“Nobunanga”（信長）のほか、“Oari”（尾張）や“Mino”（美濃）の文字が見える。アビラ・ヒロンの手によって我々は、信長の生き生きとした人物像、そして彼の生涯と彼に関わる事実について、広範にわたる緻密な描写に触れることができる。アビラ・ヒロンは信長と直接面識を得るには至らなかったものの、文書だけでなく、グレゴリオ・セスペデス神父を通じて信長についての情報を得ていた。それは何より、セスペデス神父が信長の近い友人であったことから、アビラ・ヒロンに信長について細部にわたる情報を提供していたからである。

(24) ルイス・ピニェイロ『 日本諸王殉教記』(1617 年) ― 南蛮イベリアからの眼―



Relacion del svcesso que tvvo nuestra Santa Fe en los Reynos del Iapon, desde el año de seyscientos y doze hasta el de seyscientos y quinze, Imperando Cubosama (1617) (Patrimonio Nacional)

著者のピニェイロはイエズス会神父であり、1560 年スペインのタラベラに生まれた。勉学のためにポルトガルのコインブラに移り住み、1620 年にリスボンで死去したとされる。この文書は、ピニェイロが 1617 年（元和３）にイエズス会の依頼で、公方様たる徳川家康治世下でのキリシタンをめぐる迫害や殉教を伝える記録として、当時のスペイン王フェリペ三世に献上するために執筆したものである。当時のヨーロッパ・キリスト教世界に広く流布したと言われているが、イベリアに残された貴重な殉教記録である。

パネル原文の黄色箇所 に見えるのが“Micaua”（三河）の文字である。ここには、「ディエゴ（Diego)」の洗礼名を持つ三河小笠原氏の「小笠原権之丞(おがさわらごんのじょう)」が、幕府から棄教を迫られながらも信仰を貫く固い決意が述べられている（「第１部 ヤポン（日本）の迫害について」のなかの「第９章 宮廷（幕府）から追放された 14 名の騎士の一人はどのように存在したのか」)。